

# 状態変化を表す軽動詞「する」：語彙概念意味構造からの「AをBにする」構文の分析

著者	山田 昌史
雑誌名	言語科学研究：神田外語大学大学院紀要
号	24
ページ	135-152
発行年	2018-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001469/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001469/</a>

## 状態変化を表す軽動詞「する」： 語彙概念意味構造からの「AをBにする」構文の分析

山田 昌史  
(常葉大学)

### 要旨

本稿は、補文節に生じる「AをBに(して)」の形式が主文に生じて、軽動詞「する」を主要部にする構文(本稿ではこれを「AをBにする」構文と呼ぶ。)について、この構文の意味的、統語的特徴を観察し、語彙概念意味構造(=LCS)の枠組み、特に、影山(2004)の「青い目をしている」構文で提案されたLCSと意味編入の理論を採用して、この構文について理論的枠組みを提案した。この構文は、(i) 軽動詞「する」と共に生じるヲ格、ニ格で標示される1つの名詞句は、スクランプリングを許さない、(ii) ニ格名詞句と軽動詞「する」が1つの語彙的要素として働き、(iii) 「AがBになる」を含意し、意味的に状態変化を表す構文と相同であることを明らかにした。そして、影山(2004)が「青い目をする」構文の分析から導き出した軽動詞「する」のLCSを援用し、この構文も同様の「する」のLCSを持ち、下位事象の未指定の部分に変化動詞のLCSを意味編入することで派生されるLCSから本構文の統語的・意味的特徴が説明されることを提案した。

キーワード: 「AをBにする」構文、語彙概念構造、状態変化構文、  
意味編入

### 1. はじめに

本稿は、これまで(1a)のように付帯状況を表す従属節として議論されてきた「AをBに(して)」の形式が、(1b)のように主節に生じる例(これを本稿では「AをBにする」構文と呼ぶ。)に焦点をあて、この構文がどのような統語的・意味的特徴を持つのか明らかにする。そして、この構文に対して語彙概念意味構造(=LCS)の観点から理論的分析を試みる。

- (1) a. マサオは、タバコを口に（して）、町を歩いた。  
 b. マサオは、息子を医者にした。

(1a) の「AをBに（して）」という形式を持ち、付帯状況を表す従属節については、これまで様々な分析がなされてきた（cf. 村木（1983）、寺村（1983）、桑平（2007）など）が、(1b) のような主節に生じる構文についての研究は、同じように軽動詞「する」を主動詞とする「漢語＋する」(cf. Ito&Mester（1988）など）の形式をとるものと比べてあまりなされておらず、また、この構文に理論的な枠組みを与える提案はこれまでなかった。この構文は、(A) 構文を構成する2つの名詞句（ヲ格名詞句とニ格名詞句）の交替が許されない、(B) ヲ格名詞句のみ統語操作（受動化等）の対象となる、(C) 動作主の主体的動作を表す「する」を主動詞とするにもかかわらず、被動作主体（ヲ格名詞句）の状態変化を表し、「AがBになる」の形式を含意するなど、統語的・意味的に興味深い特徴を持っている。このことから、この構文を詳しく観察し、一般化を導き、それを理論的に分析することでこれまで提案されてきた軽動詞「する」の様々な分析に対して、新たな視点から理論的説明を与えることができると思われる。

本稿の構成は以下の通りである。まず、2節において、主文に生じる「AをBにする」構文を観察し、この構文の特徴を明らかにする。特に、2.1節では統語的観点、2.2節では意味的観点から本構文を観察し、構文の成立要件を明らかにする。3節では、影山（2004）の「青い目をしている」構文の分析を概観し（3.1節）、これを援用してLCSの観点から「AをBにする」構文の理論的枠組みを提示する（3.2節）。具体的には、影山（2004）は、軽動詞「する」は上位事象のみからなり、下位事象が未指定であるLCS (= [ ]<sub>x</sub> CONTROL …) を提案しているが、これを基に「AをBにする」構文でも、「する」の未指定の下位事象に状態変化を表すLCSが「意味編入」することで本構文のLCSが生成され、このLCSから本構文の統語的・意味的特徴が説明されることを提案する。最後に4節で、本稿をまとめる。

## 2. 「AをBにする」構文の構文的特徴

本節では、「AをBにする」構文の特徴を統語的・意味的観点からそれぞれ観

察し、構文の基本的な特徴を明らかにする。

具体的な観察に入る前に、「AをBにする」構文の「する」の補部に生じる要素について述べておく。森田（1995）は、この位置に生じることができるのは、二格名詞句、形容動詞語幹、形容詞連用形であることを観察している。

(2) 二格名詞句が生じるパターン

- a. 息子を医者にする。
- b. 相手を目の敵にする。
- c. たばこを手にする。

(3) 形容動詞語幹が生じるパターン

- a. 息子に会える日を楽しみにする
- b. 椅子の脚をがたがたにする。
- c. 死体をバラバラにする（凶悪犯罪）

(4) 形容詞連体形が生じるパターン

- a. 千円札を細かくする。
- b. 網の目を粗くする。
- c. お肌を白くする（クリーム）

（森田（1995）：575）

このように、この構文には3つの品詞が生じことができるが、本稿では、(2)の二格名詞句が生じる例で、(2a)のような状態変化を表す例を中心に議論を行い、(2b)のような慣用句であるもの、(2c)のような位置変化を表すものは考察の対象から外す。次節以降、本構文を統語的、意味的観点から観察して、この構文の特徴を明らかにする。

## 2.1. 統語的特徴

本節では、「AをBにする」構文を統語的観点から観察する。

まず、本構文を形成する2つの名詞句であるが、2つがそれぞれ別々に「する」と統語的な関係を結んでいる訳ではない。以下のように、この構文は、それぞれの名詞句が「する」と共に述部を形成する際、文法的な差が生じる。

- (5) a. 息子を医者にする。  
b. 医者にする。  
c. \*息子をする。

(5b) のように二格名詞句は「する」と共起して述部を構成できるが、(5c) のようにヲ格名詞句はそれができない。

また、日本語は節や句を自由に入れ替えるスクランプリングを許す言語であることから、ヲ格・二格の2つの名詞句をこの操作によって入れ替えられることが予測される。しかし、(6b) のようにそれができず、常に「AをBに」の語順で生じる。

- (6) a. 息子を医者にする。  
b. \*医者に息子をする。

ここまでの観察から、二格名詞句は「する」と結びつきが強く、2つが合わさってあたかも1つの動詞として働いているかのように見える<sup>1</sup>。このことは、さらにいくつかの統語テストによって明らかとなる。

まず、副詞句の挿入について観察する。以下のように、ヲ格名詞句と二格名詞句の間には、副詞句を挿入することができるが、二格名詞句と「する」の間には、それが許されない。

- (7) a. 息子を無理やり医者にした。  
b. 豚のかたまりをこんがり丸焼きにした。  
(8) a. \*息子をして無理やり医者にした。  
b. \*豚のかたまりを丸焼きにこんがりとした。

(8a) は一見すると文法的であると思われるが、それは「無理やりする」という複合動詞として解釈される場合であって、(7a) と相同の意味としては容認されない。このことから、二格名詞と「する」の間には副詞句が挿入できないといえる。

次に、受動化について観察する。ヲ格名詞句を受動化の対象として主語に繰

り上げた例が以下である。

- (9) a. 太郎は、息子を医者にした。  
b. 息子が父親に（無理やり）医者にされた。
- (10) a. 太郎が、豚のかたまりを丸焼きにした。  
b. 豚のかたまりが、太郎に（こんがり）丸焼きにされた。

(9b)と(10b)では、二格を伴う名詞句が2つ繋がることになり、容認度が低く感じられるが、2つの二格名詞句の間に副詞を介在させ、2つの二格名詞句が隣り合わなくなると、容認可能な受け身文が生成される。

一方、二格名詞句を受動化の対象として主語に繰り上げると、非文法的となる。

- (11) a. \*医者が太郎に息子をされた。  
b. \*丸焼きが太郎に豚のかたまりをした。

このような受動化の例から、「AをBにする」構文では、ヲ格名詞句は動作を表す他動詞と同じように受動化の対象となるが、二格名詞句はその対象とならないことが分かる。また、(11)の非文法性は、主語の名詞句が二格であることに起因すると考えることもできるが、(12)のように二格を持つ名詞句は受動化の対象となることから、(11)の非文法性は二格であるからとはいえない。

- (12) a. 太郎が銃口を花子に向けた。  
b. 花子が銃口を向けられた。

その一方で、(13)のように、二格名詞句と主動詞が結束して慣用表現となる例では、二格名詞句が受動化の対象とならないことはよく知られている。

- (13) a. せっかくの行為を無下にする。  
b. せっかくの行為が無下にされた。  
c. \*無下がせっかくの行為をされた。



(17) は (16) から「いい」「まっ」をとった例である。(17) は、二格名詞句がヲ格名詞句に化成することを表していることから文法的であるが、容認度がかなり低い。これは、「AをBにする」構文の表す化成は、(16) のように被動作主体の結果状態に新たな価値を付け加えるものでなければならないことを示している。つまり、二格名詞句は、ヲ格名詞句の(有為な)変化状態と認識されるものでなければならないといえる。

また、(16) が状態変化を表していることは、以下の例から確かめられる。

- (18) a. \*父親は息子を医者にしたが、息子は医者にならなかった。  
b. \*その会社は石けんをいいにおいにしたが、石けんはいいにおいにならなかった。

池上(1980)は、前節がその否定となる後節と意味的に矛盾を生み出す時、前節は結果を含意するとしている。これは出来事取り消し(event cancelation)と呼ばれるもので、述部が状態変化を表しているかどうかの判断材料の1つとされる。これを(14a)と(15a)に当てはめたのが(18)であるが、これらの文の文法性から「AをBにする」構文は、状態変化を表しているといえる。

さらに以下の例を観察する。

- (19) a. UNESCOは平泉を世界遺産にした。  
b. 母はご飯を大盛りにした。  
c. 東国原知事は宮崎を元気にした。  
(20) a. \*UNESCOは平泉を世界遺産にしたが、平泉は世界遺産にならなかった。  
b. \*母はご飯を大盛りにしたが、ご飯は大盛りにならなかった。  
c. \*東国原知事は宮崎を元気にしたが、宮崎は元気にならなかった。  
(21) a. UNESCOは平泉を世界遺産に\*(して)、年次大会を閉会した。  
b. 母はご飯を大盛りに\*(して)、息子に食べさせた。  
c. 東国原知事は宮崎を元気に\*(して)、知事を辞職した。

(19) の例でも、「AをBにする」構文が(20) のように出来事取り消しのテ



ストによって、状態変化を表していることが確かめられる。興味深いのは、(21)の例である。主文に生じる「AをBにする」構文を従属節に埋め込むと「AをBにして」の形式では容認されるが、それから「して」を削除した「AをBに」の形式では容認されない。これは、従属節の表す意味特徴と「する」の働きによって説明される。つまり、「AをBにして」節から「して」を削除した「AをBに」節は付帯状況を表すが、「して」を伴う「AをBにして」のテ形節は、「する」の連用形「し」が存在し、(19)の文のように主節では状態変化を含意する。「Bにする」の形式が結果状態を含意するのに必須であるとする、(21)のように「して」を削除してしまうと、本来表すべき結果の意味が保証されなくなり、(21)のように「して」が義務的であることが説明される。これらの例からも、「AをBにする」構文は状態変化を表す構文で、ヲ格名詞句が変化主体で、その変化状態を「する」と結束している二格名詞句で表していると分析できる。

### 2.3. 「AをBにする」構文の特徴

ここまで、「AをBにする」構文の特徴について観察してきた。この構文の特徴は、以下のようにまとめられる。

- (22) a. 軽動詞「する」が選択するヲ格、二格で標示される2つの名詞句は、「ヲ格—二格」の順で生じ、スクランプリングを許さない。  
 b. 二格名詞句と軽動詞「する」が1つの語彙的要素として働く。  
 c. 「AがBになる」を含意し、動作主体の動作の結果、変化主体であるヲ格名詞句の状態変化を二格名詞句で標示する、状態変化を表す構文である。

本節では、「AをBにする」構文の基本的な特徴について述べてきた。この構文は、ヲ格として生じる名詞句を二格名詞で表す状態に変化させるという意味を持つ構文であり、統語的にも二格名詞と「する」が1つの語彙的要素としてふるまうため、ヲ格名詞と二格名詞のスクランプリングを許さない構文であることが明らかになった。

次節では、本節で観察した構文の特徴が、提案するLCSによって理論的枠組みが与えられることを主張する。

### 3. 「AをBにする」構文の派生メカニズム

前節までに主文に生じる「AをBにする」構文の特徴を明らかにした。本節では、本構文の派生メカニズムをLCSの理論的枠組み、特に、影山（2004）の軽動詞「する」に関する提案を援用して提案する。

本節ではまず、「AをBにする」構文に理論的基盤を与えるために、本稿で議論している構文と同様に軽動詞「する」を含む「青い目をしている」構文に関する分析を提案する影山（2004）を概観し（3.1節）、そして、そこでの提案を援用して「AをBにする」構文を派生するメカニズムを提案する。そして、この提案から2節で観察した本構文の特徴（= (22)）が説明できることを主張する（3.2節）。

#### 3.1. 影山（2004）

本節では、「AをBにする」構文の具体的な提案を行う前に、本稿が採用する理論的枠組み（影山（2004））について概観する。

影山（2004）は、「青い目をしている」のように軽動詞「する」を主要部に持ち、意味的には属性記述の解釈を持つ構文について、LCSの観点から理論的分析を行っている。この構文は、以下の特徴を持っている。

- (23) a. ヲ格名詞句は「対象の根源的属性」を示すものである。
- b. ヲ格名詞句は指示性のない不定名詞となり、それに連体修飾表現が付属する。
- c. テイル形で生じて、構文全体がindividual-levelの叙述となる。

影山は、軽動詞「する」のLCSとヲ格名詞句の特質構造をもとに、「意味編入」と「出来事象の抑制」の2つの操作を仮定することでこの構文を理論的に説明している。

(24a) は、(24b) のLCSを持つことで、(23) の特徴が導きだされるとされる。

- (24) a. 彼女は、細い指をしている。
- b.  $[[arb] \text{ CONTROL } [[彼女]_x \text{ BECOME } [[_{STATE} [\text{指}] \text{ BE AT- } [\text{細い}]] \text{ BE AT- } [ ]_x ]]]]$  (影山（2004）：33)

(24b) のLCSだが、以下のようなプロセスを経て派生するとされる。

(25) a. 軽動詞「する」の語彙概念構造

$[ ]_x$  CONTROL .....

b. 「指」の特質構造

$$\left( \begin{array}{l} \text{形式役割} = \text{entity } (y) \\ \text{構成役割} = \text{PART-OF } [ ]_x \\ \text{主体役割} = [ [ ]_x \text{ BECOME } [ [ ]_y \text{ BE AT-BODY-OF-} [ ]_x ] ] \end{array} \right)$$

c. 派生

$[ ]_x$  CONTROL .....

↑ 「意味編入」

$[ [ ]_x \text{ BECOME } [ [ ]_y \text{ BE AT-BODY-OF-} [ ]_x ] ]$

d. 細い指をしている

$[_{\text{Event}} [ ]_x \text{ CONTROL } [_{\text{Event}} [ ]_x \text{ BECOME } [_{\text{STATE}} [ ]_y \text{ BE-AT-BODY-OF-} [ ]_x ] ] ] ]$

(影山 (2004) : 30)

影山は、軽動詞「する」のLCSは、(25a) のように自発的な出来事であることを示す上位事象を持つ一方で、下位事象は未指定で、いわば、骨組みだけで構成されるものとしている。そして、その未指定の下位事象に、「する」が選択する項の特質構造 (= (25b)) のうち、主体役割に記述されているLCSを結合する。このような、あるLCSに別の特質構造の一部であるLCSを結合させる操作は「意味編入」と呼ばれている。この操作によって (25d) が派生する。しかし、(25d) のLCSは「青い目をしている」構文と類似の形式を持ちながら (25) の性質を持たない「装着を表す『する』 (= (26a))」のLCS (= (26b)) と同様のものになってしまう。

(26) a. ネクタイをする。

b.  $[_{\text{Event}} [ ]_x \text{ CONTROL } [_{\text{Event}} [ ]_x \text{ BECOME } [_{\text{STATE}} [ ]_y \text{ BE-AT-BODY-OF-} [ ]_x ] ] ] ]$

(影山 (2004) : 29)

(26) は、動作主がある行為を行うことで、自分の身体上にモノが存在する

よくなるというstage-levelの解釈を持ち、(23)の特徴と異なる。(26b)と同じ構造を持つ(25d)は、(23c)の意味的特徴が捉えられないことになる。そこで、影山は、「出来事事象の抑制」という操作を仮定して、LCSにおいてstage-levelの解釈からindividual-levelの解釈へと変換することを提案している。これは、意図的な動作を表す上位事象([ ]<sub>x</sub> CONTROL)を抑制し、そこに[arb]が生じることで具体的な時空間で行為が起こらなくさせる操作である。この操作の結果派生したのが(24b)のLCSである。このLCSは(26b)と異なり、(23)の特徴が捉えられるとされる。

ここまで、影山(2004)について概説してきた。本稿にとってこの分析が重要なのは、軽動詞「する」のLCSは、意志的動作を表す上位事象と未指定の部分からなる下位事象によって構成される点、そして、その未指定の部分に「意味編入」の操作によって、別のLCSを結合することで新たな意味内容を持つLCSが派生される点である。この提案によって、動作主の主体的動作から属性叙述を表す多様な意味内容を表す構文に生じる軽動詞「する」が、単一のLCSを基盤として、その派生が予測できることが期待される。そこで、次節で「AをBにする」構文に影山(2004)の提案を援用することで、この構文の派生メカニズムをLCSから説明でき、(22)でまとめた本構文の特徴をLCSから導き出すことを提案する。

### 3.2. 「AをBにする」構文の分析

本節では、前節で概説した影山(2004)を援用して、「AをBにする」構文の派生メカニズムについてLCSの観点から理論的分析を提案する。

本稿の提案は以下である。

- (27) a. [ ]<sub>x</sub> CONTROL …  
 b. [ [ ]<sub>y</sub> BECOME [ ]<sub>STATE</sub> [ ]<sub>y</sub> BE AT-[ ]<sub>z</sub> ] ]  
 c. [ [ ]<sub>x</sub> CONTROL [ [ ]<sub>y</sub> BECOME [ [ ]<sub>y</sub> BE AT-[ ]<sub>z</sub> ] ] ]

(27a)は、影山(2004)の提案する軽動詞「する」のLCSである。前節でも述べたように、このLCSは上位事象だけの骨格部分からなり、その下位事象の未指定の部分に別のLCSが編入することで、軽動詞「する」が表す様々な意

味を表すLCSが派生される。(27b)は、変化事象を表すLCSである。前節で述べたように、「AをBにする」構文は、「AがBになる」構文を内包する。このことから、「AをBにする」構文のLCSの派生には(27b)のLCSが必須となる。(27a)の未指定の部分に(27b)が「意味編入」することで、(27c)のLCSが派生する。これが「AをBにする」構文のLCSである。このように、影山(2004)を援用することで、「AをBにする」構文の派生メカニズムが説明できる<sup>2</sup>。

具体的な例で本稿の提案を概説する。

(28) a. 太郎が豚のかたまりを丸焼きにする。

b. 豚のかたまりが丸焼きになる。

(29) a. [太郎]<sub>x</sub> CONTROL …

b. [[豚]<sub>y</sub> BECOME [<sub>STATE</sub> 豚のかたまり]<sub>y</sub> BE AT- [丸焼き]<sub>z</sub>]]

c. [[太郎]<sub>x</sub> CONTROL [[豚のかたまり]<sub>y</sub> BECOME [豚]<sub>y</sub> BE AT- [丸焼き]<sub>z</sub>]]

(29b)は、変化を表す(28b)のLCSである。(29b)のように項が挿入され、y項がガ格名詞句、z項が二格名詞句として生じると(28b)が派生する。一方、(29b)が(29a)の未指定の部分に「意味編入」すると、(29c)のLCSが派生する。(29c)では、動作主体がx項に、被動作主がy項に、そして、被動作主の変化状態がz項に生じることで全体として状態変化を表すLCSが派生する。このような派生メカニズムによって(28a)が派生されると分析する。

本稿の提案によって、(22)でまとめた「AをBにする」構文の特徴を捉えられる。

まず、「AをBにする」構文は、状態変化を表すという意味特徴であるが、(29c)を以下の状態変化動詞のLCSと比較すると、両者が相同であることが分かる。

(30) 砕く : [[ ]<sub>x</sub> CONTROL [[ ]<sub>y</sub> BECOME [[ ]<sub>y</sub> BE AT- [small pieces]]]]

(影山(1996):216)

状態変化動詞「砕く」は、ある動作主体の主体的な動作によって、物体yが粉々の状態になることを示している。このLCSは(27c)のLCSと相同である。このことから、「AをBにする」構文は状態変化を表すことが説明される。しかし、

(27c) と (30) のLCSを比較すると状態変化の項の現れ方に違いがある。(30) の状態変化動詞のLCSでは、定項として [small pieces] が指定されていて変化状態が動詞に語彙的に含意されているが、「AをBにする」構文のLCSの場合は、変化状態は名詞句として生じている。しかし、この項の結果状態の現れ方の違いは、「AをBにする」構文の二格名詞句の統語的な特徴を反映したものであるといえる。2節で述べたように、この二格名詞句は統語操作を許さず、「する」と共に1つの語彙的要素を形成する。このことから、本稿では、(30) の「砕く」のLCSの変化状態が動詞の意味の一部であるのと同じように、「AをBにする」構文の二格名詞句も動詞の意味の一部を構成していると分析する。つまり、二格として生じているが、LCSでは語彙の一部であり、(30) の状態変化動詞と相同であるとする。この分析から二格名詞句は軽動詞「する」と共に1つの語彙的要素であるとする (22b) の特徴がLCSから予測され、さらに、二格名詞句が統語的な操作を受けないことが説明される。

また、(28) のように「AをBにする」構文が「AがBになる」構文と交替でき、前者が後者を含意する特徴だが、これは (27b) のLCSが (27a) に「意味編入」することで (27c) が派生することから説明される。このことは、(27b) のLCSを持たなければ、(27a) に「意味編入」するLCSがなく、(27c) のLCSが派生されないことを予測する。このような例に当てはまるのが、以下のような従属節で付帯状況を表す「AをBにして」の形式が主文に生じた例である。これらの例では、主文に生じる「AをBにする」構文の容認度が低く、また、「AがBになる」構文が文法的とならない。

- (31) a. 大統領は群衆を前に (して) 演説した。  
 b. 太郎は親の心配をよそに (して) 女遊びばかりしている。  
 (桑平 (2007): 82)
- (32) a. ??大統領は群衆を前にした。  
 b. \*群衆が前になった。
- (33) a. ??太郎は心配をよそにした。  
 b. \*心配がよそになった<sup>3</sup>。

(31) を主文として生じさせた (32a)、(33a) は、状況を表す文として解

積されず、「する」が本来的に表す主体的動作の解釈を持つ例としては容認度が低い。これらの例では、(32b)、(33b)のように「AがBになる」構文が成立しない。このことから(29)の提案が支持され、また、2つの構文の含意関係が説明される。

しかし、本稿の提案にとって反例となると思われる例がある。

- (34) a. \*運動会を直前にした。  
a'. 運動会が直前になった。  
b. \*学校の先生になったのをきっかけにした。  
b'. 学校の先生になったのがきっかけになった。

これらの例は、「AがBになる」構文が文法的であるが、「AをBにする」構文が非文法となる例である。本稿の提案では、前者の構文の成立が後者の成立の条件となることから、前者が成立するが後者が成立しない(34)は、本稿の提案の反例となると思われる。しかし、(34)で「AがBになる」構文に含まれる「なる」は、(27b)のLCSを持つ「なる」とは性質が異なると思われる。佐藤(2005)は、「なる」は変化の意味に加えて、非変化も表すとする。

- (35) a. 三上の枠組みでは、「かみつく」は他動詞になる。  
b. このあたりは、葛飾区になる。  
c. お手洗いは、階段を上がった2階になります。（佐藤(2005):12)

(35)の各例は変化の意味を持つが、この意味よりも変化を表さない解釈の方が優位である。つまり、(35a)は、動詞「かみつく」は、他のタイプの動詞であったのに他動詞に変化したという意味よりも、それが他動詞として分類されることを意味する非変化の意味の方が自然である。また、(35)の各例は、コピュラ文(例:「かみつく」は、他動詞だ)に言い換えることができるが、このコピュラ文は変化を表していない。このように、動詞「なる」は変化と非変化の2つの意味を持つ。本稿で議論してきたように「AをBにする」構文が内包するのは、(29b)のLCSを持つ変化を表す「なる」である。このことから、「AがBになる」の形式を持っていても、それが(27b)のような変化を表すLCS



表示を持つことが必須で、非変化を表す「なる」が主動詞となる例 (= (34)) は、(27a) の軽動詞「する」のLCSの未指定の部分に「意味編入」するLCSを持っていないため、(34a) と (34b) が容認されないことが説明される。

以上、本節では、影山(2004)が「青い目をしている」構文で提案した軽動詞「する」のLCSと「意味編入」の操作を援用することで、「AをBにする」構文の派生メカニズムが理論的に捉えられ、この構文が持つ統語的・意味的特徴がLCSから導き出されることを提案した。ただし、「AをBにする」構文と影山(2004)の「青い目をしている」構文には大きな違いがある。それは、「青い目をしている」構文は、状態性を表す「ている」形で生じて、individual-levelの事象を表すのに対して、「AをBにする」構文は出来事を表す点である。この違いは、「青い目をしている」構文では「出来事事態の抑制」(cf. (24b))の操作がかかり、「する」の外項が抑制され、そこに [arb] が生じて状態性を帯びるが、「AをBにする」構文はこの操作がかからず、「する」の外項が抑制されず、状態性を持たないと分析することで2つの構文が表す出来事性の違いが捉えられると思われる<sup>4</sup>。

最後に本稿をまとめる。

#### 4. 結語

本稿は、これまであまり議論されてこなかった主文に生じる「AをBにする」構文の基本的な特徴を明らかにし、LCSの観点からそれに理論的説明を与えてきた。この構文は、二格名詞句と軽動詞「する」が1つの語彙的要素として働き、それがヲ格を伴った被動作主体を項として選択する。このため、二格、ヲ格の2つの名詞句はスクランピングを許さず、また、ヲ格名詞句のみが受動化を受ける。そして、「AをBにする」構文は変化を表す「AをBになる」構文を内包して状態変化を表し、後者の成立が前者の成立の条件となる。このような性質をもつ「AをBにする」構文に対して、本稿ではLCSの観点からその派生メカニズムを提案した。影山(2004)が提案する軽動詞「する」のLCSと「意味編入」の操作を援用することで、軽動詞「する」の未指定の下位事象に変化を表す「AがBになる」のLCSを意味編入することによって「AをBにする」構文のLCSが派生し、このLCSから、この構文の持つ上記の意味的・統語的特徴が捉えられることを主張した。本稿によって、(i) 「AをBにする」構文の一般的な特徴が明らかにされたこと、(ii) 影山(2004)が提案するLCSの「意味編入」の理



論に新たな事実から妥当性を与えたこと、(iii) 意志的動作から結果状態へと広がる軽動詞「する」の多様な意味を捉えるメカニズムの解明に寄与できることなど、記述的、理論的観点から「AをBにする」構文の姿が明らかにされた。本稿の提案が他の軽動詞「する」を主動詞とする構文に対して、説明力のある分析であるかを検証し、この提案を基に、軽動詞「する」全体の派生メカニズムをLCSの観点から提案することが今後の課題となる。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、2017年5月に召天なされた井上和子先生に感謝申し上げます。先生にこれまで頂いたあたたかいご指導、ご支援のおかげでこれまで研究が続けてこられた。先生への哀悼の意を表するとともに、感謝の意をここに記す。また、本論文について、2名の査読者から有益なコメントを多数いただいた。感謝するとともに、紙幅の都合で頂いた全てのコメントについて本論に反映できなかったことについてお詫びするとともに、残されたものについては今後の課題とさせていただきたい。

## 注

1. しかし、以下のような装着・着脱を表す「AをBにする」(cf. 影山 (1996)) では、2つの名詞句の交替が可能である。
  - (i) a. ピアスを耳にする。  
b. 耳にピアスをする。  
(i) はピアスの着脱を表す文だが、この文では2つの名詞句を交替できる。また、(3) は二格名詞句をとると文法的な文が生じないが、(i) は二格名詞を取っても文法的な文が生じる。
    - (ii) a. \*息子をする。  
b. ピアスをする。

本稿が議論するのは、(3) のようなヲ格と二格の2つの名詞句が構文成立の必須要素で、「ヲ格」「二格」の順に2つの項が生じる構文である。そのため、(i) のような装着・着脱を表す文についても議論の対象としない。
2. 影山 (2004) では、意味編入は、基体となるLCSにヲ格名詞の特質構造のLCSが編入される (cf. (25)) ことを意味するが、本稿では、影山 (2004) を援用し、あるLCSに別の

LCSが編入する操作を意味編入とする。

3. ただし、以下のような例においては、本稿にとって問題となると思われる。

- (i) a. タバコを手に（して）町を歩いた。
- b. 太郎はタバコを手にした。
- c. \*タバコが手になった。

この例では、(31)の例と同様に従属節では付帯状況を表すものの、主節に生じることができる(=lib)。この例では「手にする」という動作を表すため、また、位置変化を表しているために主節に生じることができるとと思われる。しかし、(ic)のように背後に「なる」構文を持たない。このような例（特に、主節で生じた際に位置変化を表す例）がどのような派生されるかについては、今後の課題とする。

4. この点については、査読者の先生から指摘を頂いた。さらに、「青い目をしている」構文は、individual-level predicateであるため、これを過去形にした「青い目をした」には「その人はもう生きていない」という含意 (life-time effect (cf. Kratzer (1995)))があるが、「AをBにする」構文を過去形にしても同様の含意がないことを指摘いただいた。この点については、今後の課題とさせて頂きたい。

## 参考文献

- 池上嘉彦 (1980) 『「する」と「なる」の言語学』 東京：大修館書店。
- Ito, Junko & Armin Mester. (1988) Light verbs and  $\theta$ -marking. *Linguistic Inquiry* 19, 205-232.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論?言語と認知の接点』 東京：くろしお出版。
- 影山太郎 (2004) 「軽動詞構文としての『青い目をしている』構文」『日本語文法』4巻1号、22-37.
- Kratzer, Angelika. (1995) Stage-level and individual-level predicate. Carlson, N. Gregory & Francis J. Pelletier (eds.), *The Generic Book*. 125-175. Chicago, Ill: Chicago University Press.
- 桑平とみ子 (2007) 「『する』と『なる』の省略構文の一考察」久野暲、牧野成一、スーザン・G・ストラウス (編) 『Aspect of Linguistics: In Honor of Noriko Akatsuka 言語学の諸相』78-86. 東京：くろしお出版。
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院。
- 森田良行 (1995) 『基礎日本語辞典』角川書店。

- 村木新次郎（1983）「『地図をたよりに、人をたずねる』という言いかた」渡辺実（編）『副用語の研究』267-292. 東京：明治書院.
- 寺村秀夫（1983）「『付帯状況』表現の成立の条件—『XヲYニースル』という文型をめぐって」『日本語学』2号、20-46.